

第5章

軍改革期におけるロシアの西部軍管区

ヨハン・ノルベリ

2008年、ロシアは軍改革を開始した¹。現在、ヨーロッパ諸国の大半では、経済危機への対応として国防予算が削減されている。これとは際立って対照的に、ロシアは国防費を大幅に増額しており、それは主に、ソビエト時代のものが大部分を占めている軍の装備の近代化に充てられるとみられる。2010年、ロシアの6つあった軍管区が4つに再編された際に、西部軍管区が設置された²。従来のモスクワ軍管区とレニングラード軍管区を統合したこの軍管区は、ウラル山脈以西のロシア領土のうちボルゴグラード北側の東西を結ぶ線にいたる大きな領域を管轄する。軍管区の再編、軍改革および国防費の増額は、西部軍管区の性質をどのように決定づけているだろうか。

本章の目的は、西部軍管区の部隊の戦闘態勢について考察し、2012年前半におけるロシアの軍改革の状況に照らして、その軍事能力に及ぼしている軍改革の影響を分析することである。詳細な公式情報が乏しいため、西部軍管区が受け継いだ軍事資産に関する非公式の公開情報を概観するアプローチをとる。この際、その他の軍事資産は、総体としてのロシアの西方における軍事能力に関連するとしても、除外されることになる³。また、西部軍管区と関連のあるロシア国外の軍事資産についても、本分析からは除外される⁴。本章では、他国の軍とロシア軍との比較や、ロシアの西部戦略方面における紛争の可能性についての論考は行わない。

軍事能力は、果たすべき任務に応じて、あるいは対応すべき敵に応じて変わってくる。ロシアが想定する西部軍管区の軍事上の敵対勢力は、北大西洋条約機構(NATO)である。2010年に策定されたロシアの軍事ドクトリンでは、脅威(*ugrozy*)と危険(*opasnosti*)が区別されている。脅威とは現存する明白な安全保障問題であり、これに対して危険とは、現在さほど大きな問題ではないものの、将来脅威となる可能性のあるものをいう。NATOが危険リストの最上位に置かれていることは、ロシアがこの同盟の拡大と行動に不満を抱いていることを示している。しかし、

NATO がロシア軍の戦力規模を左右する第一の要因とは考えられない⁵。それでは莫大な費用がかかることになるだろう。

2008 年時点でのロシア軍の組織は、大規模紛争に備えた数百万人の大量動員の概念に基づいて構築されていた。当時、迅速に展開できる部隊はほとんどなかったが、そのような部隊こそが、主に旧ソ連領土で急速に広がっていた紛争に対処するためにロシアが必要としていたものだった。2008 年に始まった改革の目的は、より戦闘即応性の高い、予備役約 70 万人を伴う 100 万人規模の軍隊を構築することであった⁶。部隊の戦闘即応性を高めるための措置は複数ある⁷。全体の兵員数を削減し、契約兵の割合を引き上げる。ソビエト時代のものが大半を占める現装備の約 70% を近代化する。1991 年以降の早い段階で行われた改革の試みとは異なり、今回は改革の貫徹を目指す強い政治的意志があり、国防予算は GDP の約 3% から約 4% に増額されている⁸。2020 年までに、23 兆ルーブルが軍装備の近代化 (19 兆ルーブル) と国防産業の近代化 (4 兆ルーブル) に割り当てられている⁹。

5.1 西部軍管区

新たな軍管区¹⁰

従来のソビエト時代の軍管区は、本質的に平時において地上軍を主体として編成されたものであった。有事の際は、これらが前線部隊に変わり、他軍種 (空軍および海軍) の部隊、および内務省国内軍や (国家保安委員会、略して KGB) 国境警備軍などの他省庁が管轄する部隊も指揮することになっていた。また、前線部隊は多くの場合、国外での攻撃作戦任務を負ったソビエト領土内部隊の第一梯隊であった。有事には、ソビエト領土内に残った軍管区組織は、以降の梯隊として前線の攻撃作戦に送り込まれる人員と部隊の継続的動員を行う任務を負うことになっていた¹¹。

2010 年に 6 つの軍管区が 4 つに再編された際、各戦略方面におけるあらゆる軍事資産の統合指揮を促進するため、司令部レベルの統合戦略司令部 (JSC) が設置された。北方艦隊およびバルト艦隊と包括的に再編された空軍¹²の部隊に対する指揮は、サンクトペテルブルクに新たに設置された西部軍管区に移管された。JSC の設置により、新たな各軍管区はかつての前線部隊により近いものになり、平時におい

図 5-1 西部軍管区の公開情報概観——想定される戦闘指令 (2012 年 2 月)



出典：上の地図は、Warfare.ru, on the Internet: <http://warfare.ru/rus/?linkid=2225&catid=321&lang=rus> (retrieved 13 February 2012)、*The Military Balance 2011*, pp. 183–93、およびデータベース Military Periscope (2012 年 2 月 17 日現在) のデータに基づく。数値と組織名は出典間でほぼ一致している。*The Military Balance 2011* は他の資料と異なり、組織や指揮系統に関する記述はほとんどない。Warfare.ru の数値は *The Military Balance* のものより高い傾向があり、必ずではないが、改革開始時の状況に依拠している場合が多いようである。また、*The Military Balance* はより確実性の高い情報を求めていると思われる。Military Periscope の情報は、上記二者の中間に位置する。*The Military Balance 2011* の数値のほうが日付が新しいことが、差異の要因と考えられる。これらの出典の内容を確認できる公式の情報は見つからなかったが、その理由としては、機密扱いとされている可能性があることと、特に空軍および防空・航空宇宙防衛軍において継続的に変更が行われていることがあげられる。

て、参謀本部の直接指揮下にある部隊を除く連邦軍の他軍種の部隊を指揮することになった。ただし、他省庁の部隊の指揮については、有時にのみ実行されるようである¹³。

今日のロシアの地上軍は、軍管区において領土侵犯に対する機動的防衛に用いることができる。部隊の梯隊化についての考えは、実際の配置状況から見て取れる。ロシアの自動車化狙撃旅団 (MRB) は、大部分が国境沿いに配置されている。一部の旅団は、連邦保安庁 (FSB) 国境警備軍、内務省国内軍、および集団安全保障条約機構 (CSTO) 加盟国である同盟国の部隊と共に、紛争時には第一梯隊を形成し、進攻してくる敵の地上軍を迎え撃って前進を遅らせ、そうして時間を稼いでいる間に、軍管区内の他地域から第二梯隊となる援軍が送り込まれ、これによって敵の進攻を阻止する。続いて、ロシア国内の他地域の常備部隊と、場合によっては動員された予備部隊からなる第三梯隊が、敵をロシア領土から駆逐する¹⁴。

地上軍

地上軍¹⁵における改革の主な特徴は、師団の旅団への再編であり、概して言えば、旧連隊 (戦車連隊または自動車化狙撃連隊) の機動力および火力と、旧師団の支援能力を統合した形である。新設の旅団は、戦場において連隊よりも自立のかつ柔軟に活動することができ、1 個師団全体よりも展開が容易である。構想では、重旅団 (戦車を装備した旅団)、中 MRB (装輪または装軌装甲車を装備した自動車化狙撃旅団)、軽旅団の 3 種類の旅団が設けられることになっている。軽旅団は、特殊目的のため

に編成したり（航空強襲旅団、自動車化旅団¹⁶）、特殊地域に適用させたりする（山岳旅団、北極旅団）ようである¹⁷。

旧モスクワ軍管区およびレニングラード軍管区の部隊は、新たに8個の常備機動旅団¹⁸と支援旅団に再編された。その大部分は2つの諸兵科合同軍（*Obschevoiskovaia Armia*）、すなわち、サンクトペテルブルク近郊のアガラトヴォに新設された第6諸兵科合同軍と、ニジノヴゴロド近くのムリノに所在する第20諸兵科合同軍の指揮下に置かれている。支援旅団についてはどちらもほぼ同じだが、機動旅団については第20諸兵科合同軍の方が明らかに強力である。第6諸兵科合同軍の自動車化狙撃旅団は、ヴィボルグにある第138 MRB とプスコフ近郊の第25 MRB の2個だが、第20諸兵科合同軍には4個の機動旅団があり、第9 MRB と第6戦車旅団がニジノヴゴロド近くに、第5 MRB と第4戦車旅団がモスクワ近郊に置かれている。また、西部軍管区の直轄下にも2個のMRBがあり、第200 MRB がノルウェーとの国境付近に、第27 MRB がモスクワ近郊に配置されている。さらに、MRB 2個および戦車旅団1個を支援する武器装備保管基地がある。

この配置についての一つの解釈として、第6諸兵科合同軍とムルマンスク近郊の軍管区直轄の旅団が、上述の機動防衛態勢における第一梯隊と考えられる。さらに南方では、CSTOの西部軍集団¹⁹がロシア・ベラルーシ共同第一防衛梯隊として計画されているとみられ、ロシア側では、たとえばモスクワ近郊の第27 MRB なども参加する可能性がある。戦車旅団2個（ロシアの新設戦車旅団の半数）を有する第20諸兵科合同軍は、第二梯隊として軍管区内のどの方面にも派遣されうる。ロシア西部の比較的良好な発達した鉄道・道路網と河川が、こうした移動を円滑にすると思われる。おそらく第三梯隊となる部隊への戦力補強の準備は、機動旅団3個を支援できる武器装備保管基地と複数の支援旅団の存在から明らかとみられる。部隊の補強は、ロシアの他地域からこれらの部隊向けに確保されている兵員を派遣することによって迅速になされるか、あるいは、やや時間はかかるが、他の軍管区からの部隊全体の派遣、もしくは予備役の動員によって実施され则认为られる²⁰。

空軍

ロシア空軍（*Voennno Vozdushnye Sily*—VVS）は、今回の改革で大きく変わった。

主に参謀本部が率いていた旧航空軍が、1つの中央司令部に再編された。この中央司令部は、主に部隊の展開と7つの作戦司令部を監督する。新設された4つの各軍管区にはそれぞれ、その軍管区の領域を管轄する1つの空軍・防空司令部 (AFADC) が設置され、軍管区司令部／統合戦略司令部の管轄下に入った。空軍中央司令部／参謀本部の下には依然として、軍事輸送航空司令部、戦略爆撃航空司令部、航空宇宙部隊司令部の3つの組織が残されている。かつての空軍師団と空軍連隊は中央航空基地 (軍管区ごとに1個) に改編され、その下に7～8個の補助航空基地 (*aviagruppy*) が置かれた。部隊数は半数になり、使用中の軍用飛行場数は2008年の計画で、ロシア全土で245カ所から約30カ所に削減されることになった²¹。

西部軍管区では、旧第6および第16航空軍が第1空軍・防空司令部に統合され、西部軍管区の中央航空基地 (第7000航空基地) もあるヴォロネジに置かれている。西部軍管区には約280機の航空機 (うち戦闘機約160機、攻撃機約50機、戦闘・対地攻撃機 (FGA) 約70機) があるが、それらがどのように編制されているかについての情報は情報源によって異なる。インターネットの情報によれば、すべての空軍部隊は第1空軍・防空司令部の指揮下にあるとされている。一方、2011年版 *The Military Balance* によれば、西部軍管区に属するのは戦闘機約90機のみで、攻撃機はまったくないが、特殊目的航空司令部の下に戦闘機約70機と攻撃機／FGA 約120機があるとされている²²。2012年版 *The Military Balance* では特殊目的航空司令部への言及はなく、FGA 125機が西部軍管区に属するとされている。数字は前年版とほぼ同じだが、Su-25 攻撃機がより高性能の Su-24 に更新されたとみられている²³。ロシアの報道によれば、2012年には近代的な Su-34 攻撃機約20機が第1空軍・防空司令部に配備される予定である²⁴。

防空旅団 (ADBde) についても情報源によって情報が異なる。2012年前半時点でのそれらの配置は明確になっていない。2011年版 *The Military Balance* では西部軍管区に所属の防空旅団は2個とされているが、インターネットの情報によれば、その数は4個防空旅団と加えて2カ所の旅団補給基地となっている。各部隊の名称と、おそらくはそれらの指揮系統も変更された可能性がある。かつての防空部隊 (PVO) は、おそらくは2011年末の航空宇宙防衛軍 (VKO) の包括的再編に沿って、航空宇宙防衛旅団と改称された。しかし、防空旅団を用いる可能性のある各軍、軍

管区および VKO 中央司令部間で、その使用をどのように調整するのか、あるいは地上軍の防空部隊や空軍の防空のための戦闘機部隊 (MiG-31) と防空に関してどのように調整するのかについては確認できなかった。

海軍

ロシア海軍の任務は、概して言えば、通常兵器と核兵器を備え、海洋における国の核抑止力を保持し、外洋におけるロシアの権益の擁護を確実にし、そしてロシアに対する海上からの武力行使を防止することである²⁵。北方艦隊とバルト艦隊は、以前はモスクワの参謀本部に属する海軍司令部の指揮下にあったが、2010 年に新設の西部軍管区の管轄下に移った。軍改革の過程で、海軍 (沿岸防衛部隊と海軍歩兵隊を含む) は徐々に常時即応態勢に移行していく計画である。

カーニングラードにあるバルト艦隊は、海軍歩兵隊最大の部隊 (総勢 2,500 名の第 336 独立旅団) を有し、2012 年には 4,000 名を目標に増員予定と言われているが、海軍部隊の中での優先度は比較的低いとみられる²⁶。2011 年版の *The Military Balance* とインターネットの情報を見たところ、バルト艦隊の部隊の統括作戦司令部がカーニングラードに置かれていることはほぼ明らかである。

北方艦隊の主な特徴は、海軍の通常戦力とは対照的にかなり良好な状態に維持されてきた、ロシアの核抑止におけるその役割である。西部軍管区の部隊のうちコラ半島に所在するすべての兵科の部隊は、同軍管区の他の部隊とは地理的にかなり離れている。インターネットの情報では、第 200 MRB が軍管区の資産 (2 つの諸兵科合同軍のいずれにも属さない部隊) としてあげられている。その理由の一つは、部隊の作戦調整が、カーニングラードのバルト艦隊司令部と多少なりとも同様に、北方艦隊司令部によって行われるためと考えられる。これが現在進行中の北極での軍事的能力の構築との関連でどう進展していくかは、まだ定かではない。

北極での軍事的能力

ロシア国防省は 2012 年初め、ロシア軍は、いわゆるロシアの「北極戦略」に沿って、特別通常北極部隊²⁷ を編成しつつあると表明した²⁸。この部隊の任務は、北極にある国境の監視 (連邦保安庁国境警備軍と共同で) および潜在的な商用航路の監視で

ある。構想されている北極旅団は軽旅団になると言われている²⁹。報道ではノルウェー国境近くの第 200 MRB が言及される場合が多いが、さらにムルマンスクとアルハンゲリスクの 2 カ所を拠点とする可能性のある、2 つの北極旅団にも言及されている³⁰。また、2012 年には東部軍管区で北極部隊のための将校の訓練を実施する計画があるとの情報もある³¹。

ここでは機動力が強調されており、そのねらいは、北極旅団にある程度の航空機動力を持たせることとされる³²。北極部隊には地上軍だけでなく、空挺部隊や海軍艦艇も加わると伝えられている³³。広大で、おそらく大部分は道路もないロシアの北極海地域には、部隊を常時駐留させようとするよりも、領土沿いのいたるところから空路や海路を使って部隊を派遣できるようにする方が理に適っている。また、これは、統合作戦を拡大したいというロシアの考えにも合致している。

戦略的機動力と援軍派遣

西部軍管区の戦闘態勢は、西部戦略方面におけるロシアの軍事能力の一部に過ぎない。必要であれば、他の軍事資産をそこへ移動させることができる。ここでは、ロシアの部隊の縮小に伴って重要性を増しつつある戦略的機動力に注目する。改革計画では部隊数の大幅削減がうたわれ、空軍と海軍では半減し、地上軍ではそれ以上の削減がなされている³⁴。解隊された部隊の中には基幹要員のみのスケルトン部隊も多いが、兵員数の減少によって、特に脅威が高まりつつある状況に迅速に対応するためには、主に地上軍を必要な場所に移動させる能力がきわめて重要になる。

ロシアの戦略的機動力は、道路、鉄道、空路、河川を使った輸送に依存している。鉄道部隊 (ZhDV) は、国営鉄道会社が大量輸送に対応できるように、鉄道網の機能維持を保証する。自動車 [輸送] 部隊 (Avtomobilnye voiska) は道路輸送を提供する。ロシア国内の道路網と鉄道網は、いずれもウラル以西が最も発達している。軍事輸送航空隊 (VTA) は主に精鋭の空挺部隊の空輸を担うが、その他の部隊の空輸にも対応する。興味深いことに、改革における空挺部隊と鉄道部隊の削減計画は約 14 ~ 17% で、他部門よりはるかに少ない³⁵。可能な地域では、国内河川も輸送に利用される。これらはすべて、各鉄道駅、港湾、空港に設置された緻密な軍事通信システム (VOSO) によって管理されている³⁶。戦略的機動力は毎年行われる戦略演

習の不可欠な要素になっており、旅団規模までの部隊の長距離移動が行われる。たとえばロシア西部で行われた大規模演習「ザーパド（西）2009」の射爆場演習には、中央軍管区から部隊が投入された³⁷。

西部軍管区には、必要が生じた際に他の軍管区へ部隊を派遣する役割もあると考えられる。考え方としては、装備というより兵員を移動させるということのように思われる。戦略的機動力は、主に（これだけではないが）西部から東部への移動を想定しているように思われる。東部軍管区以外の3つの軍管区には軍司令部が2つずつあるが、東部軍管区には4つ置かれている。このことは、他地域からの部隊を受け入れ、指揮する余力の能力があることを示唆している。機動旅団用の武器装備保管基地の数も、東部軍管区は他の軍管区より多い³⁸。戦略的機動力が機能するためには、他所から派遣された兵員が、保管された装備を利用できる必要があり、その装備は良好な状態に維持されていなければならない。部隊全体を輸送すれば、それらの部隊は自分たちの装備を使用できるが、それでは時間がかかるうえに、攻撃にさらされやすくなってしまう。

カリニングラード特別州

カリニングラードがバルト海に面するロシアの飛地領となった1991年以後、この州の軍事資産はバルト艦隊の指揮下に入った。その後何年にもわたってこの州では海軍部隊に重点が置かれ、地上軍と空軍の部隊はほとんど関心を向けられないまま衰退した。2010年の再編でバルト艦隊は、作戦面では西部軍管区の指揮下に入ったが、その後も、作戦目的で他部門の軍事資産を引き続き自己の管轄下に置いたが、兵站および管理の責任はサンクトペテルブルクの西部軍管区司令部に移された³⁹。

カリニングラードは弾道ミサイル防衛問題における要所だった。西側との協議が紆余曲折をたどったことは、ロシアが地対地ミサイルシステム「イスカンデル」（NATOコード名SS-26ストーン）を配備する政治的理由となった。2012年にはS-400地対空ミサイルシステムの配備が計画されている⁴⁰。これらの軍事的資産により、バルト海地域におけるロシアの軍事能力は明らかに強化された。第336海軍歩兵旅団は本来攻撃作戦部隊だが、飛地領内での地上軍との協同による、バルト艦隊およびその他の施設の防衛もおそらく重要な任務である。

演習

ロシア軍は 2010 年から 2011 年にかけて、兵員の訓練、新たな構想の展開、改革の各段階の実施と評価を目的として、大規模な戦略演習を毎年実施した。これらの演習は、様々な種類の作戦（通常型地上戦、対テロ作戦、防空、指揮・統制、他省庁および他国との共同作戦など）を対象とし、戦略的な部隊の移動や部分的な動員といった要素も含んでいた。新設の西部軍管区は、これらのどの演習でも中核は担わなかったが、ロシア極東での戦略演習「ヴォストーク（東）2010」に、大陸を横断して攻撃機を派遣するなどの形で寄与した。これらの攻撃機は空中給油の後、地上の目標を爆撃する演習に参加し、西部に帰還した⁴¹。ロシア西部で実施された最後の主要な演習は、ロシアとベラルーシの合同演習「ザーパド 2009」と「ラドガ 2009」である（新たな西部軍管区の創設前）。今後数年以内に西部での演習の実施が予想される。

5.2 西部軍管区に影響し得る改革の主要点

改革の主要点の一部は、西部軍管区に影響を及ぼすと考えられる。2012 年初めのロシア軍の装備は大半がソビエト時代のもので、近代的な戦闘即応部隊の構築にとって大きな障害であると度々言われてきた。総額 19 兆ルーブルに及ぶ 2020 年までの国家装備計画は、2020 年までに装備の 70% を近代化することを目標としているが、これがまったく新しいシステムを意味するのか、あるいは新規製造の旧式システムやシステム改良のみを意味するのかははっきりしない⁴²。目標と計画、予算があるのは明らかだが、ほとんど改革がなされていない国防産業がこの期待に応えられるかどうかは不透明である。2008 年から 2011 年にかけては、情勢が不安定な北コーカサス地方一帯を担当する南部軍管区が、地上軍の装備更新において優先された軍管区だったと思われる⁴³。西部軍管区は、戦闘・対地攻撃機（FGA）および防空資産に関してはより優先されていたように見える。

改革の主要点の一つは、動員を必要としない定員が充足した部隊の構築である。2011 年の時点で、この点は部分的にしか達成されていないと思われる。新設の地上軍の旅団の 60% ほどが戦闘即応態勢にないと言われている⁴⁴。殊に総勢 100 万人

の組織を目指すとするれば、兵員確保は依然として改革におけるアキレス腱である⁴⁵。本質的に、即応性を高くするには、費用のかかる契約兵が必要になる。任期1年の徴集兵のほうが安上がりだが、除隊後の有用性は低い。徴集兵は半年ごとに交代するため、部隊の訓練レベルはそのたびに低下する。人口動態の見通しは暗く、公衆衛生状態も思わしくないうえ、徴兵予定者の間で入隊意欲も低い現状では、ロシア軍が2011年に新設の常備部隊に80万人以上を確保できたとは考えにくい。将来的により持続可能な兵員数は約60万人と見込まれる⁴⁶。

2012年初めの時点でのロシアの動員能力は明らかではない。2008年に理論上は動員可能だった数百万人よりは、おそらく低下していただろう。約70万人の動員予備兵力は、新設の常備部隊の定数を補うものであり、除隊した旧契約兵および徴集兵の徴用可能性を維持する手段となる。ロシアは大量の旧式な装備を有しており、こうした装備によってそれら予備部隊の装備がまかなわれる。能力の低い部隊であっても数的に補強するという措置は、比較的弱小の敵に対する場合や、正規部隊の他の地域への派遣により生じた欠員の補充、低強度の平和作戦には有用な場合もあり得る。動員は大規模戦略演習の一環ともなっており、このことは、組織的な動員能力を保持したいというロシアの意志の表れである。

5.3 結論

2012年初めの時点で、ロシア軍の改革は完了したわけではない。上述の組織再編は引き続き立案および実施中であり、兵員確保と装備についても変更が進行中である。こうしたことはいずれも時間がかかり、その過程で度重なる調整が必要になる。無理もないことだが、2009～2012年に実施された変更によって、ロシアの全体的な軍事能力は低下した。しかし、これによって、より強力で実用に適した将来の軍を構築するための基礎が築かれることにもなる。2012年から2020年にこの軍がしだいに形を成してくるにつれて、ロシアの軍事能力も強化されるはずである。ただし、そのためには強い政治的意志と十分な予算充当の継続が必要になる。

ロシアの西部軍管区は、NATOという先進的な想定する敵対者と相対しているにもかかわらず、短期的にはやや優先度が低いと見え、他の軍管区の方がより重要視され

ている。情勢不安の続くコーカサス地方に近い南部軍管区には、新規装備の大半が供給されている。中央軍管区は、いつ何が起こるかわからない中央アジアでの軍事活動を担当している。長期的には、東部軍管区がアジアにおける近隣国の拡大する軍事能力への対応を迫られる可能性がある。

ロシアの2010年の軍事ドクトリンは主として防衛的だが、攻撃能力の保持にも目を向けている。西部軍管区の部隊は、定員を充足し、近代装備を備えることによってかなりの規模になるが、広大な領土を管轄する責任も負っている。特に複数方面からの脅威に直面した場合、西部軍管区の戦力は援軍がなければほぼ防衛的なものにしかなりえない。西部軍管区の攻撃能力は、その使用範囲を限ってでも戦力を集中させることが必要だが、ロシアの国境のすぐ外側での限定的な攻撃作戦にはおそらく十分であろう。このような作戦の範囲と継続期間は、たとえば敵側とロシア側双方の援軍派遣能力などに依存することになる。しかしこれは、局地戦争、地域戦争および大規模戦争に関するロシアの軍事的思考がどのように展開していくかにつれて変わっていく可能性もある。

2012年現在、西部軍管区の当面の優先度は比較的低いにしても、ロシアの軍改革が西方におけるその軍事態勢に及ぼす影響を注視していくことは重要であろう。西部軍管区の実力の拡大は、様々な要因に依存すると考えられる。その一つは軍種間や省庁間の、およびCSTO同盟国との共同作戦を計画・実施する能力であろう。もう一つは軍種や省庁をまたがる新たな統合指揮統制システムを開発・導入する能力であろう。また、ロシアが国外からの調達を決めた武器装備やノウハウを追っていけば、ロシアが選んだ方向性を読み取れるだろう。動員予備兵力の構築や、武器装備や基地が実際に言葉通りに退役・閉鎖されているかどうか、注目すべき問題である。さらに、ロシアの通常の軍事資産が、かなり大規模ではあっても限界のあるものであることを考えれば、戦略的機動力の発展が決定的に重要になると考えられる。

今回の軍改革は量的な意味で巨大なプロセスであり、9つの標準時間帯にわたって散在する100万人以上の兵員、数十万点に及ぶ武器装備に影響を及ぼしている。開始から3年を経た今、組織再編の段階は完了したとみられる。装備、兵員確保、指揮統制などその他の問題への対応が、今後何年にもわたって続くことになる。

- ¹ ここでいう「改革」は、国防省および参謀本部の管轄下にある通常戦力における変化を指す。しばしば用いられる「軍改革」という用語は、実際には防衛産業や他省庁に属する部隊も含むもっと広範な変化を意味する。これまでのところ、国防省管轄下の軍では他の部門よりはるかに大規模な変化が起きている。
- ² Prezident Rossii (2010) 'Ukaz Prezidenta RF ot 20.09.2010 N 1144 "O voenno-administrativnom delenie Rossiiskoi Federatsii"' [Presidential Decree No. 1144, 20 September 2010, 'On the Military Administrative Division of the Russian Federation'], on the Internet: <http://graph.document.kremlin.ru/page.aspx?1;1298267> (retrieved 12 January 2012).
- ³ 除外される軍事資産としては、非通常型兵器と、西部軍管区に置かれるが参謀本部および他省庁の部隊の直接指揮下にある軍事施設や部隊などがある。
- ⁴ 集団安全保障条約機構 (CSTO) 西部軍集団におけるロシアのパートナーであるベラルーシ軍は、西部軍管区の作戦計画立案にとって重要であると考えられるし、西部軍管区司令部の管轄下にある、沿ドニエスル地域に駐屯する大隊規模の平和維持部隊も同様である。
- ⁵ Vendil Pallin, Carolina and Westerlund, Fredrik (2010) *Rysslands Militärdoktrin 2010—en övergripande analys* [Russia's Military Doctrine 2010—an overall analysis] (in Swedish, FOI Memo 3097, on the Internet: <http://www.foi.se/upload/pdf/David%20RUFs/FOI%20MEMO%203097%20Rysslands%20milit%C3%A4rdoktrin%202010.pdf>, p. 2 (retrieved 14 February 2012).
- ⁶ Nikolskii, Aleksei (2009) 'Novyi stroi' [New structure], *Vedomosti*, 30 December 2009, on the Internet: <http://www.vedomosti.ru/newspaper/article/2009/12/30/222460> (retrieved 29 May 2012); and Gavrilov, Yurii (2011) 'Prizivu otkazali v dolgoi zjizni' [Refused Call Up for a Long Life], *Rossiiskaia gazeta*, 18 November 2011, on the Internet: <http://www.rg.ru/2011/11/17/armiya-site.html> (retrieved 29 May 2012).
- ⁷ ロシアの報道によれば、週 7 日 24 時間の即応性があると主張する部隊は多い。しかし、これが訓練レベルや部隊の結束力などの質的側面に関して何を意味するのかは不明瞭である。ここで言う「即応部隊」とは、人員と装備が完備した部隊を意味する。週 7 日 24 時間の即応性とは、おそらくある部隊のどの部分であっても、いかなる時間帯でも戦闘即応態勢をとれるという意味だと思われる。すべての部隊が常に 1 時間で即応態勢をとれるということはありえない。それでは訓練や保守管理、休暇などに充てる時間がなくなってしまう。
- ⁸ Oxenstierna, Susanne 'Försvarsekonomi' [Defence Economy] in Vendil Pallin, Carolina (ed.) (2012) *Ryska militär förmåga i ett tioårs perspektiv—2011* [Russian Military Capability in a Ten-Year Perspective—2011], March 2012, User report, FOI-R—3404—SE, p. 147.
- ⁹ Putin, Vladimir (2012) 'Byt silnymi: garantii natsionalnoi besopasnosti dlia Rossii' [Being Strong: A guarantee for national security for Russia], *Rossiiskaia Gazeta*, 17 February 2012, on the Internet: <http://www.rg.ru/printable/2012/02/20/putin-armiya.html> (retrieved 20 February 2012).
- ¹⁰ 西部軍管区における部隊配置を分析する可能な方法については、2011 年 12 月 5 日に、ロシア軍参謀本部軍事アカデミーの卒業生で、スウェーデンの在モスクワ国防武官を 5 年間務めたペール・ブリッド大佐に話を聞いた。また、筆者は、初期の草稿に関して貴重な意見をいただいたカルリス・ネレトニークス少将 (退役) と FOI の同僚で上級分析官のフレドリク・ヴェステルンドにも感謝したい。
- ¹¹ 詳細については、Suvorov, Viktor (1987) *Inside the Soviet Army* (London, Grafton Books), pp. 228–30 を参照。
- ¹² 主に空軍の旧航空部隊及び防空部隊の航空機を指す。戦略爆撃機と軍事輸送航空隊 (戦略空輸) は、引き続き参謀本部の管轄下にある。
- ¹³ ペール・ブリッド大佐の談話 (2011 年 12 月 5 日)。

- 14 Ibid.
- 15 ロシア国防省の英語ウェブサイトでは「Army (陸軍)」が用いられている。
- 16 おそらく装輪装甲車を備えた軽歩兵部隊と考えられる。
- 17 'Rossia prodolzhit formirovat arkticheskie brigady' [Russia continues to form Arctic brigades], *Infors News Agency*, 9 January 2012, on the Internet: <http://infors.ru/?module=news&action=view&id=28666> (retrieved 15 February 2012).
- 18 「機動旅団」とは、戦車旅団や自動車化狙撃旅団など、領域の奪取と確保ができる攻撃作戦のための部隊を指す。「新たな姿 (*novyi oblik*)」の旅団は、兵員と装備が完備しているものとされており、したがって常時即応旅団と呼ばれる。
- 19 Karavaev, A. (2007) 'EvrAzES i ODKB v Tsentralnoi Azii—problemy integratsii regiona' [Eurasian Economic Union and CSTO in Central Asia—problems in the region's integration, *centrasia.ru*, 12 April 2007, on the Internet: <http://www.centrasia.ru/newsA.php?st=1176450720> (retrieved 19 March 2012).
- 20 ベール・ブリッド大佐の談話 (2011 年 12 月 5 日)。
- 21 Carlsson, Märta and Norberg, Johan (2012) 'De Väpnade Styrkorna' [The Armed Forces] in Vendil Pallin (ed.) *Rysk militär förmåga i ett tioårsperspektiv—2011*, p. 229.
- 22 The International Institute for Strategic Studies (2011), *The Military Balance 2011* (London, Routledge), pp. 188–91.
- 23 The International Institute for Strategic Studies (2012), *The Military Balance 2012* (London, Routledge), pp. 198–99.
- 24 Lenta.ru (2011) 'Zapadnyi Voennyi Okrug poluchit 14 bombardirovshchikov Su-34' [Western MD Will Receive 14 Su-34 Fighter/Ground Attack Aircraft], *Lenta News Agency*, 22 December 2011, on the Internet: <http://lenta.ru/news/2011/12/22/bomber/> (retrieved 15 February 2012).
- 25 Carlsson and Norberg, op. cit., p. 233; and the Russian MoD homepage, on the Internet: <http://structure.mil.ru/structure/forces/navy.htm> (retrieved 5 March 2012).
- 26 Carlsson, Märta (2012) 'De ryska Marinstridskrafterna' [The Russian Navy], FOI Memo 3770 (Stockholm, FOI), p. 10.
- 27 'Rossiia prodolzhit formirovat arkticheskie brigady,' op. cit.
- 28 'Osnovy gosudartvennoi politiki Rossiiskoi Federatsii v Arktike a period do 2020 goda i dalneishuiu perspektivu' [Foundations of the Russian Federation's Policy in the Arctic until 2020 in a Longer Perspective], *Security Council of the Russian Federation*, on the Internet: <http://www.scrf.gov.ru/documents/98.html> (retrieved 15 February 2012).
- 29 'Rossiia prodolzhit formirovat arkticheskie brigady,' op. cit.
- 30 Gavrilov, Yu. (2011) 'Soldaty ukhodiat na sever' [Soldiers Go [out] Northwards], *Rossiiskaia gazeta*, 14 September 2011, on the Internet: <http://www.rg.ru/2011/09/14/arktika.html> (retrieved 15 February 2012).
- 31 'Start podgotovki voennykh dlia sluzhby v Arktike zaplanirovali ha 2012 god' [Beginning of Training Military [Personnel] for Service in the Arctic is Planned for 2012] (2012) *Vzglyad Delovaia gazeta*, 5 November 2012, on the Internet: <http://www.vz.ru/news/2011/11/5/536259.html> (retrieved 15 February 2012).
- 32 'Chast arkticheskikh brigad Suchoputnykh voisk khotiat sdelat aeromobilnymi' [They Want to Make Part of the Arctic Brigades Air Mobile], *RIA Novosti*, 17 May 2011, on the Internet: http://ria.ru/defense_safety/20110517/375689574.html (retrieved 16 February 2012).
- 33 Gavrilov (2011) 'Soldaty ukhodiat na sever.'

³⁴ Carlsson and Norberg, op. cit., p. 219.

³⁵ Ibid.

³⁶ ペール・ブリッド大佐の談話 (2011 年 12 月 5 日)。

³⁷ Wilk, Andrzej (2009) 'Russia Practices War in the West,' *Centre or Eastern Studies*, on the Internet: <http://www.osw.waw.pl/en/publikacje/eastweek/2009-09-30/russia-practices-war-west> (retrieved 29 May 2012).

³⁸ Carlsson and Norberg, op. cit., p. 327.

³⁹ ペール・ブリッド大佐の談話 (2011 年 12 月 5 日)。

⁴⁰ Pinchuk, A. (2011) 'Kaliningrad ukrepitsa "Triumfom"' [Kaliningrad Will Be Reinforced with 'Triumf'], *Krasnaia zvezda*, on the Internet: <http://redstar.ru/index.php/component/k2/item/114-2011-12-09-01-04> (retrieved 14 February 2012).

⁴¹ 'Russia: Vostok-2010 military drills successful,' *China Daily*, on the Internet: http://www.chinadaily.com.cn/world/2010-11/24/content_11604226.htm, (retrieved 19 March 2012).

⁴² 戦略技術分析センター (CAST, モスクワ) のルスラン・プチョフの談話 (2011 年 5 月)。

⁴³ McDermott, Roger (2012) 'Russia Modernizes South Military District,' *Eurasia Daily Monitor*, Vol. 9, No. 92, on the Internet: http://www.jamestown.org/single/?no_cache=1&tx_ttnews%5Btt_news%5D=39375&tx_ttnews%5BbackPid%5D=587 (retrieved 25 May 2012).

⁴⁴ *The Military Balance 2011*, p. 176.

⁴⁵ Carlsson and Norberg, op. cit., pp. 219–22.

⁴⁶ 複数の専門家が、より実現可能な兵員数を 60 万人程度と見積もっている。McDermott, Roger (2011) *The Reform of Russia's Conventional Armed Forces: Problems, Challenges and Policy Implications* (Washington D.C., Jamestown Foundation), p. 152 などを参照。また、ルスラン・プチョフ (モスクワ、2012 年 2 月 6 日) およびペール・ブリッド大佐 (2011 年 12 月 5 日) の談話にも基づく。

